

ロマンス語における口蓋化の問題点

—— イタリア語、サルジニア語を中心に ——

La palatalizzazione nelle lingue romanze con particolare riguardo all'italiano e al sardo

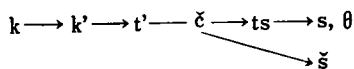
菅田 茂昭
Shigeaki SUGETA

1. 口蓋化とは “le phénomène particulier d'assimilation que subissent certaines voyelles ou certaines consonnes au contact d'un phonème palatal” (J. Dubois ほか, *dictionnaire de linguistique*, 1973) と解説されているように特殊な同化現象である。フランス語の cou「首」と qui「誰」とにおける [k] の起こり方を比べると qui では硬口蓋母音 [i] の影響で (後部) 硬口蓋子音として現われることに観察される。これは共時的な現象であるが、口蓋化はことに通時的には重要な音声変化をなしている。

口蓋化はラテン語からロマンス語への変遷のなかでも子音に起こった変化のうち、ロマンス語圏の広範囲にわたり、新しい子音体系の形成にいたるもっとも重要な変化であった。ラテン語の CENTUM の語頭音 [K] からイタリア語の cento における [č] にみられるような、C, G の硬口蓋母音の前での口蓋化はその代表的なものであり、しかももっとも規模の大きなものである。ロマンス語圏に局地的に起った口蓋化現象としては、C + a (◎CANTO > ◎chante など), C, G 以外の子音 + yod (◎FORTIA > ◎forza など), CL などの子音連結 (◎CLAVE > ◎chiave など) が挙げられ、さらにここでは扱わないが、母音についても口蓋化の存在 (◎MAR > ◎mer など) が認められ、いわゆるウムラウト現象に由来するものはその典型である。

なお、ロマンス語における口蓋化は一般に語頭と語中におけるものであるが、カタラン語においては語末に口蓋化を有する結果を生じているのが注目される (◎vaig, any, cfr. ◎signe)。

2. 非口蓋音から口蓋音への口蓋化とその後の発展の歴史的な過程については、k を起点とする場合、ロマンス語においてこれまでに提案された図式のうちもっとも妥当と考えられるのは次のものであろう。



音声学のおよび音素論的な二つの側面を含んでいる。音声学的には子音の口蓋母音への (逆行的) 同化と見做すことができる。音素論的には、口蓋化子音が異音として相補的分布をなす段階 (cfr. 現代フランス語の cou と qui における 2 種類の [k] の場合) と口蓋化子音が新しい系列の音素として成立する段階とが区別される (cfr. Lausberg 1971, p. 276-7; Tekavčić 1972, p. 151)。

音素論的側面の第 1 段階は、ラテン語の正書法における C, K, Q の 3 種類の文字の存在に反映している。第 2 段階はこんにちのイタリア語の状態でもあり、chi「誰」: ci「そこに」にみられる。なお vinco「私は勝つ」: vinci「君は勝つ」においては形態音素をみることができる。

さて口蓋化の契機については、いくつかの仮説が存在する。A. Martinet は硬口蓋母音の前で ku > kw の

ように u の半母音化を契機として本来の kw>k (したがって kwe, kwi>ke, ki) を生じ、順に本来の k>č を連動的に生じたと仮定している。ことにこの w の消失は、Appendix Probi の例 COQUI NON COCI からも裏付けられるが、⑩QUINQUE> ⑪cinque, ⑫cinco のようにこんにちのロマンス諸言語に受け継がれている。

ただし、マルティネの仮説にとって不都合な事例も存在する。サルジニア語では kw>k が起ったにもかかわらず、本来の k が口蓋化しなかったからである。逆にフリウリ方言やルーマニア語においては、本来の k が口蓋化すると同時に kw から生じた k も口蓋化している (フリウリ方言にて QUID> ce, ルーマニア語では QUAERERE>a cere, プーリア方言でも QUID>če)。さらにダルマチア語では kw>k のあと本来の k が i あるいは je の前でのみで口蓋化している (Tekavčić 1972, p. 154)。

動機および過程はともあれ、結果的には表のように、最初相補分布をなした要素が独立し、二つの系列の音素 /k:/ /č/ をなすにいたったのである。

ka ko ku	ke ki
ča čo ču	če či

なお、母音の口蓋化については、ことに A の場合その原因をケルト基層に帰するのは G.I. Ascoli である。しかしフランス語では A の口蓋化が開音節に限られるのに対して、イタリア語では閉音節でも起こるといゼレは説明できない。

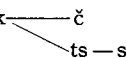
C+e, i の口蓋化は、C+yod の口蓋化と同じ結果を生じているわけではないが、後者は前者を経験しなかったサルジニア語を含め、ロマンス語圏の全領域に分布していることから、後者を先行タイプと見做すことができる。

ここで最初の図式に戻り、ロマンス語における k の口蓋化とその発展結果を概観するとき、興味ある事実を指摘することができる。発展結果の主要段階がこんにちのロマンス語圏のいずれかの地域に存続し、空間的反映をなすという事実である。

まず起点をなす C(+e, i) は、こんにちのサルジニア語の一部 (ヌーオーロ方言 kelu 「空」, fakere 「行」) に存続する。さらにゲルマン語やバスク語のなかに借用語として残留している (⑬Kirsche 「サクランボ」, ⑭bake 「平和」)。

次に後期ラテン語のテキストにみられる、yod の前での IUSTICIA 「公正」, PONTIFITIUS 「司政の」などの綴字の混同が口蓋化の進行を裏付けてくれる (Tekavčić 1972, p. 252)。Pompeius も “si dicat Titius pinguius sonat.....” のように「より鈍い音」として記している (Díaz y Díaz 1962, p. 94)。序でながらずで Appendix Probi のなかに VINEA NON VINIA などの例が存在することも忘れてはならない。

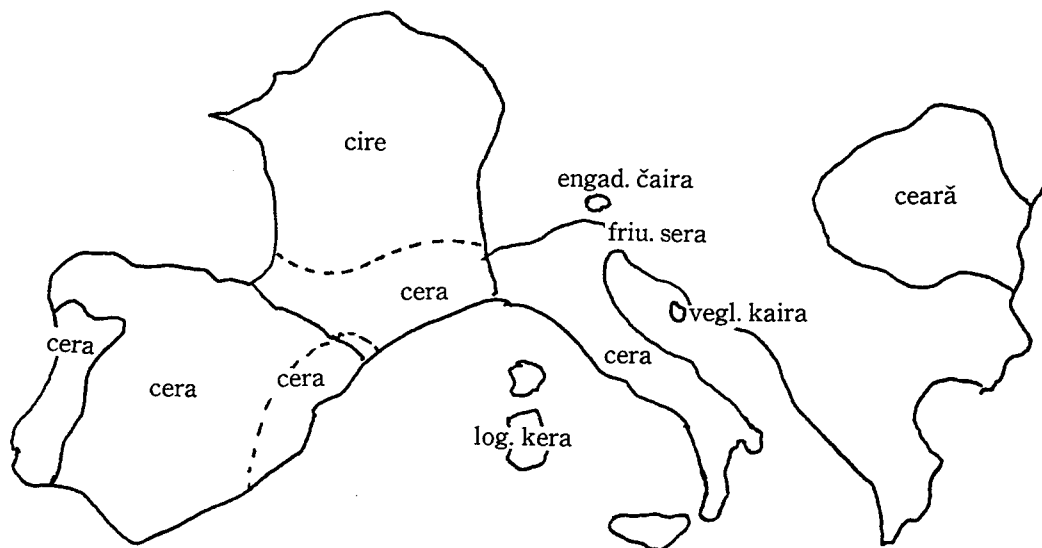
こんにちのロマンス語圏が、この口蓋化の達成をもとに、č の段階にとどまる東ロマニアとさらに ts を経て s, θ にいたる西ロマニアとに La Spezia—Rimini 線により2分されることは十分に知られている (従来ロマンス語の概説において結果論的に



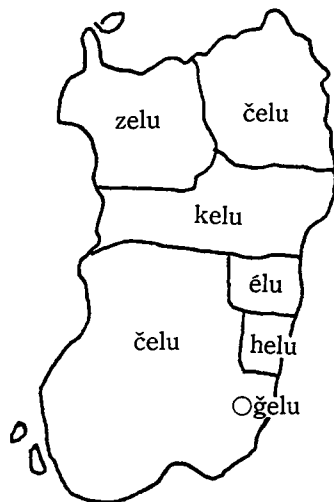
のごとく整理したものもみられるが、ここでは地理言語学的妥当性のために č—ts—sのごとく č を古い段階と見做していることに注目されたい。

ロマンス語における C(+e, i) の口蓋化の分布をラテン語 CERA 「ろう」を起点として示しておきたい。分布図は W. Meyer-Lübke の Romanisches etymologisches Wörterbuch (1975⁶) をもとに筆者が作成したもの

である。



しかしながら口蓋化の分布がこのような単純ではないことを示すために、サルジニア島におけるラテン語 CAELU 「空」の結末を M. Contini (1987) をもとに挙げておきたい。



なお、子音連結における k の口蓋化も指摘したところであるが、ロマンス語の子音を論ずる際に欠かせない -CT- を選んでその興味ある分布を概観しておきたい。

LACTE 「乳」: pg. leite, sp. leche, cat. llet, pr. lach, fr. lait, it latte, log. latte, engad. lat, rom. lapte.

-CT- においては西ロマニアが重点的に口蓋化を経験するが、東ロマニアではイタリア語で順行同化により -tt- のように2重子音化、ルーマニア語で -pt- といった具合にロマニアを大きく3分化 (t に単純化しているエンガディヌ方言を加えれば4分化) している。

G の口蓋化は k のそれとは平行せず、その複雑さはさらに次に触れるイタリア語の例からも明らかであるが、スペイン語では GENTE>gente に対してアラゴン方言に šen, GENISTA>hiniesta に対して同方言で ginestra (cfr. ②genêt), あるいは chinesta などがみられるといった具合であることを述べるにとどめたい (A. Zamora Vicente 1960, p. 223; P. Giov. Battista Mancarella 1978, p. 55)。

3. もっとも広範囲に及び口蓋化した C-, G- を選んで、そのイタリア半島におけるおおまかな分布をみると、

	CENTU 「百」	GENISTA 「エニシダ」	または	GELU 「氷」
北 部	ts tsentu	dz	dz	dz
トスカーナ	č čento	ǰ	ǰ	ginestra
南 部	č čiendo	y (ǰ), (š)	y (ǰ), (š)	yanesta
				šinestra

C- と G- との口蓋化は、北イタリア、トスカーナまでは平行するが、南イタリアでは部分的な平行が認められるものの分裂する。

なお、yod の前の子音の口蓋化に関しては、一般にこの同化現象をこうむりやすい子音として C, G, T, D, さらに S, L, N などがあり、これらが (S のほとんどを除き) 母音間で重子音をなすのは標準イタリア語に特有の現象として注目される (FACIO>faccio, VINEA>vigna など)。

TY の口蓋化は、北イタリア、トスカーナともに本来は ts であるが、ときに北イタリア系の ts とトスカーナ系の č とが同時にみられる。PRONUNTIARE から pronunziare と pronunciare とが共存する。この標準語における混同はこんにちなお未解決の状態にある。これは TY 本来の結末 ts がトスカーナにおいて KY の結末 č と混同された結果と考えられている。č と ts が現実には対立しにくいように見えることに注目しておきたい (cfr. caccio: cazzo)。なお、COMINITIARE にいたってはトスカーナ系の cominciare が北イタリア系を駆逐している。DY は、たとえば RADIU が、raggio 「光線」と razzo 「ロケット」を2重に生んだが、意味の分化により両者が共存している。

4. 以上の簡単な報告は、ロマンス語に起こった口蓋化の代表的な型に触れたとはいえ、その全体像を対象としたわけではない。しかしながら C- の口蓋化への接近は、つぎのような興味ある事実注目させてくれる。第1に、C- の口蓋化は、ラテン語の子音体系が比較的単純であったため、ロマンス語において空間埋め合せの原理により結果的により豊かな子音体系の形成へと通じたことを挙げたい。第2に、口蓋化の発展段階がロマニアの各地に空間的に反映している事実を強調したい (サルジニアのごとく孤立した、あるいはイタリア南端の周辺地域に古形が残ることもおおまかに確認できる)。第3に、口蓋化はこんにちの標準語に立止まる限りおおまかにいく通りかの発展方向をたどることが可能であるが、ことに方言を観察しはじめると、きわめて複雑な様相を呈して行くことはサルジニア半島の例のみならずである。北イタリアにおいても C(+e, i) の結末の複雑さは AIS の教えてくれるところである。ところがイタリア語には -PY- に由来する sapiente 「賢明な」と saccente 「知ったかぶりの」があり、後者は口蓋化を生じた南イタリアから借入した単語である (cfr. ナポリ方言 saccio 「私は知っている」、さらにはフランス語の条件法 sache……)。また南イタリアには HABEO CANTARE>aggio canda 「私が歌いませう」のように -BY- の口蓋化もみられることを挙げておく。SINGULARIS>cinghiale 「いのしし」にみられる語頭音の口蓋化は特異な例である。第4に、口蓋化は R. ヤーコブソンの母音・子音3

角図を通して眺めると compact → diffuse, grave → acute への移行であるといえることを指摘したい (cfr. Jakobson 1956)。第5に、にわたりの鳴き声のように k 音要素を必然的に含む場合 (cfr. ㊦quiqueriqui ㊧chicchilichì) はラテン語 (cfr. cicirrus 「鬪鶏」) 以来の伝統を受け継ぐものであり、口蓋化を生じなかったことも注目に値する (cfr. A. Traina 1973⁴, p. 55)。なお、さいごに口蓋化はタ行音にチ、ツを持つ日本語には馴染みの現象であることを付け加えておきたい。

主要参考文献

- Contini, M. (1987), *Etude de géographie phonétique et de phonétique instrumentale du sarde*, Alessandria.
Díaz y Díaz, M. C. (1962²), *Antología del latín vulgar*, Madrid.
Lausberg, H (1976²), *Linguistica romanza*, 1, Milano.
Mancarella, G. B. (1978), *Linguistica romanza*, Bologna.
Martinet, A. (1955), *Economie des changements phonétiques*, Berne.
Rohlf, G. (1966), *Grammatica storica della lingua italiana e dei suoi dialetti*, 1, Torino.
Tagliavini, C. (1969⁵), *Le origini delle lingue neolatine*, Bologna.
Tekavčić, P. (1972), *Grammatica storica dell'italiano*, 1, Bologna.
Traina, A. (1973⁴), *L'alfabeto e la pronunzia del latino*, Bologna.
Zamora Vicente, A. (1979²), *Dialectología española*, Madrid.